

# 白藍塾オリジナル

## 2024年度 入試小論文分析 & 解答のヒント

2024年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・法学部

例年、「1000字以内で課題文の要約+自分の意見の論述をまとめる」という形式だったが、今年度は出題形式が大きく変わった。対話形式で書かれた課題文の指定された箇所(2箇所)において、自分も議論に参加している体で意見を述べるという、一見ややこしい問題だ。

ただし、どちらも論点が明示されていて、何を論じるべきかははっきりしている。毎年難解な文章についての長い要約+論述が求められて苦労していたことを考えると、論点の明確な短めの小論文を2つ書けばよいという点では、むしろ取り組みやすいかもしれない。

課題文は、フランス革命の評価をめぐる対立する3人の思想家の架空の対話を描いている。取り上げられている論点自体は現代の民主政治においてもしばしば問題になっているものなので、フランス史などの歴史的な背景知識はそれほど必要ないだろう。

Iでは、「革命は正常な政治の一部分である」というペインの考え方について論じることが求められている。これは、権力に対抗するための暴力を正当化できるかどうかという問題だ。暴力や革命といったことに対しては、とくに現代の日本では抵抗を感じる若者が多いと思うが、「どんな状況であれ暴力はよくない」といった一般論を書いても意味がないので、その点は注意しよう。あくまでも民主主義の理念や考え方を踏まえて考える必要がある。

イエス・ノーどちらの立場で書いてもよい。もちろん、イエスの立場で「民主社会においては、あくまで言論によって権力に対抗すべき」などと論じるほうが書きやすいだろう。だが、「権力の不当な行使に対しては市民にも抵抗権(場合によっては革命権)がある」というのが近代の政治思想の一般的な考え方でもある。したがって、第2部で無制限の暴力を認めないようにすれば、ノーの立場で書いても十分説得力のある内容になる。

IIでは、「民主主義においては多数派が少数派を抑圧しうる」というバークの批判が問題になっている。いわゆる「多数者の専制」というのは民主主義の根幹に関わる問題だ。民主主義においては多数決によって政治的な意思決定がされるため、少数派はつねに意思決定から排除され、場合によっては抑圧の対象にされてしまう。イエスの立場であれば、そうしたことを具体例も交えて論じるとよいだろう。

もちろん、多数決原理そのものは、一人の独裁者や少数の政治的エリートが権力を独占する状態

への対抗として生まれたものなので、一概には否定できない。少数者による権力の独占を許さないためにも、多数派の国民の意思が政治に反映されるような仕組みにするのは、民主主義にとって不可欠とも言えるはずだ。そのように、ノーの立場で書いても十分説得力がある。

いずれにしても、政治や民主主義についてしっかりと勉強してきた受験生であれば、それほど悩むことなく書けるはずだ。

書き方は、通常の4部構成を応用できる。ただし、あくまで議論に参加している体なので、課題文に合わせて敬体にしたり、問題提起の代わりに結論で始めたり、といった工夫は必要だろう。

\* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>